

龍源寺の歴史について(六)

松原 泰道

はじめに記しましたように、龍源寺は麻布本村から現在地の三田に引き移ったのは元禄十一年(一六九八)二月五日であります。今から二百六十九年前になります。

その移転の理由は古記録によりますと、水のはけ方が悪く境内南方の崖は、風雨のたびに崩れるので元禄九年(一六九六)の頃から寺社奉行に願いで、隣地の農家惣右衛門の田畠九百六十三坪に替地することを許されました。

然し、そこもまた幕府の用地になることにきまつたため、改めて幕府機関に代地として三田古川町の小出千代という武家の上屋敷内を希望地に申出て許可されました。

その頃の当寺住職四世絶外和尚の古文書を見ると敷地千二百五十坪余で「東は水谷主水殿、西は古川

を隔てて堀玄番守殿屋敷に接し南は農家源蔵の住居に、北は古川に注ぐ幅一間の下水で限られた地域」とありますから、ほぼ現在地であると思われまゝ。

現在地は豊岡町といいますが、それは「東京市史」によると豊岡某が開拓したのによるといわれています。

龍源寺の前身の龍翔院の三田移転と共に、水月堂(観音堂)も移されたと思われまゝ。開山さまが帰依された当寺の如意輪観音さまは安産の観音さまとして古来親しまれ、火伏せの観音と崇められました。享保年間には江戸三十三所の二十四番霊場であったことが、「続江戸砂子」に記載されていますが、現にその石標が本堂前に水鉢と共に現存します。そのご詠歌に「あわれみのちかいあまねきしるしにや波もかけきそうかむひろを」とあります。

その後三十年を経た延享二年

(一七四五)には東都府内三十三所の二十番札所ですから当時の江戸でも広く知られた霊場と思われるます。また本堂に聖観音さまも奉安されてありますが、その記録はありません。

古川移転当時の境内古図が保存されていますが、それを見ると千二百五十坪余の境内には、山門(間口三間半)は古川に西面して立ち、門の左側に鎮守堂、浴室、鐘楼が並び、向い側に衆寮(寺僧の宿舎)と三間梁の寮があります。浴室の北側に前記の水月観音堂を拜します。三間四方とあります。その外に拝殿を見うけます。山門正面が玄関で右側は大庫裡、左方が方丈(本堂)、方丈の裏が位牌堂で、そこから並木を距てて東北に墓地という規模でありました。